

美術館だより

Contents

- 1 企画展「ひろがる墨一五彩に出会う」(五浦美術館)
- 2 企画展紹介「ひろがる墨一五彩に出会う」(五浦美術館)
- 3 企画展紹介「筑波大学 日本画40年の軌跡」(五浦美術館)
- 4 再開館に向けての取り組み(五浦美術館)
- 5 企画展紹介「日本画の150年 明治から現代へ」(近代美術館)
- 6-7 企画展紹介「いわさきちひろ展」(近代美術館)
- 8-9 昨年度の「withコロナ」を振り返る―「6つの個展 2020」から(近代美術館)
- 9 事業レポート(つくば美術館)
- 10 新収蔵品紹介(近代美術館)
- 11 企業パートナー制度(近代美術館)
- 12 インフォメーション

天心記念五浦美術館「ひろがる墨一五彩に出会う」より



浅見貴子「Matsu20」平成17(2005)年 作家蔵

浅見貴子(1964-)は植物をモチーフに、主に墨と和紙を用いて制作を行う画家です。「Matsu20」は画面全体が大小様々な墨の点で覆いつくされ、画面の外にまで墨が広がっていくようなエネルギー感や、紙の上で踊るようなリズムカルな墨の動きが心地よい印象です。一見すると抽象画のようですが、画面をよく見ると、ところどころに枝木を表すかのように墨線が、あるいは白の線が走り、墨の点と交差しながら植物を複雑に構成していることに気がきます。実際に浅

見は丹念なスケッチをもとに制作を進めており、光や風の動きで刻一刻と変わる対象の姿を捉えています。

また浅見は、墨を和紙の裏側から使うという独自の手法を用いています。画家は、墨を裏からにじませることで、時に思いもよらない効果が生まれると言います。そこには、墨が見せる様々な表情との「出会い」が予感されるようです。

[天心記念五浦美術館 学芸員 塩田 稔雄]

企画展紹介 ひろがる墨—五彩に出会う

会 期：令和3年7月28日(水)～9月26日(日)
 休 館 日：毎週月曜日
 ※ただし8月9日(月・振)は開館、翌10日は休館。9月20日は開館
 入 場 料：一般730(630)円／満70歳以上360(310)円／
 高大生520(420)円／小中生320(210)円
 ※()内は20名以上の団体料金
 ※障害者手帳等をご持参の方は無料
 ※土曜日は高校生以下無料
 ※9月15日～9月21日は満70歳以上無料
 主 催：茨城県天心記念五浦美術館
 後 援：朝日新聞水戸総局／茨城新聞社／株式会社茨城放送／
 NHK水戸放送局／産経新聞水戸支局／
 東京新聞水戸支局／毎日新聞水戸支局／
 読売新聞水戸支局／北茨城市／北茨城市教育委員会

展覧会の概要

本展では、主に茨城県近代美術館の所蔵品を中心に、墨が印象的に用いられた近現代の作品の数々を紹介いたします。中国から伝来した墨の文化は、日本の絵画史を墨抜きでは語ることが不可能なほど、決定的な影響を与えました。水墨画の伝統は近現代の日本画にも引き継がれ、横山大観や竹内栖鳳をはじめ多くの画家たちが墨画を手掛けました。

墨との向き合い方は画家によって様々です。墨線を重視するもの、伝統的な^{しゅんぼう}皴法を独自に発展させるもの、墨が生み出すにじみやぼかしといった効果に注目するものなど、墨の秘める無数の可能性を各々が切り開き、新たな作品を生み出しています。本展では、そうした墨の世界について、その多様な表現に着目しながら紹介いたします。「墨に五彩あり」と謳われる墨の豊潤なイメージのひろがりをご堪能いただければ幸いです。

みどころ

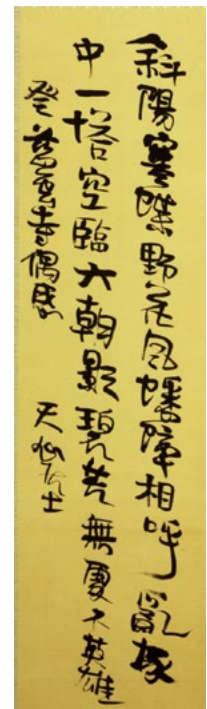
本展では、横山大観、小川芋銭、奥原晴湖といった

県ゆかりの作家をはじめ、竹内栖鳳や富田溪仙、前田青邨など近代日本画家から、現在第一線で活躍する浅見貴子まで、様々な作品を展示し、作家たちが墨という伝統的な画材をどのように捉え、新たな作品を生み出してきたのかを紹介いたします。例えば大観の「朝霧」は、墨のぼかしを活かしながら巧みに空気感を演出しており、「余白」の美を日本画の特質と捉えていた大観の美意識が読み取れる作品です。

また、当然ながら墨は日本画だけで使われる画材ではありません。県ゆかりの彫刻家、木内克の作品には、墨で裸婦を描いたものがあります。その姿はまさに、木内彫刻独特のフォルムを思わせるものであり、木内にとって墨が制作上の重要な画材となったことが窺えます。そのほか、洋画家の岸田劉生、版画家の棟方志功が墨を用いた作品なども紹介し、日本画を越えて、墨が様々なジャンルで制作に使われている実例を取り上げます。

そして、岡倉天心と墨の関わりについてもコーナーを設けます。天心の代表的著作『茶の本 (The Book of Tea)』では、禅宗が墨画 (black and white sketches) を好んだ理由について言及しながら禅の精神について語っています。『茶の本』とともに、天心の書や絵画も併せて紹介いたしますので、当館ならではの展示としてご覧いただければ幸いです。

[天心記念五浦美術館 学芸員 塩田 稔雄]



岡倉天心
「登慈雲寺偶感」
制作年不詳
茨城県天心記念
五浦美術館蔵



横山大観「朝霧」昭和9(1934)年



速水御舟「寒林」
大正14(1925)年



竹内栖鳳「水郷」
昭和16(1941)年



木内克「裸婦」
昭和32(1957)年



小川芋銭「海島秋来」
昭和7(1932)年

※所蔵表記のないものは、茨城県近代美術館蔵。

企画展紹介 筑波大学 日本画40年の軌跡

会 期：令和3年6月12日(土)～7月18日(日)
 休 館 日：毎週月曜日
 入 場 料：一般320円(260)円／満70歳以上160(130)円／
 高大生210(150)円／小中生150(100)円
 ※()内は20名以上の団体料金
 ※障害者手帳等をご持参の方は無料
 ※土曜日は高校生以下無料
 ※6月12日(土)は満70歳以上無料
 主 催：茨城県天心記念五浦美術館
 後 援：筑波大学

展覧会の概要

東京教育大学を前身とする筑波大学が開学したのは昭和48年(1973)のことでした。2年後の昭和50年には、芸術専門学群が設置され、さらに日本画に関するカリキュラム導入が検討されますが、創画会で活躍していた西村昭二郎の教授着任は、昭和57年を待たなければなりません。そして昭和62年、同学群絵画コースから日本画コースが独立し、以来、国立の総合大学では唯一の、また茨城県内で唯一の日本画の専門教育機関として、多くの画家や美術教師、あるいはデザイナーや研究者などを輩出してきました。

本展では日本画コースの歴代教員8名による作品を展示し、同大学の日本画教育の歩みを紹介します。8人の日本画家は教鞭を執りながら、それぞれ個性豊かな作品の創造者として活躍してきました。その作品はまた、昭和50年代より最先端の研究者が集う筑波研究学園都市の、地域性や時代の空気をも映しているかもしれません。急速に変化を遂げる筑波の地で育まれて

きた、瑞々しい日本画表現をお楽しみください。

みどころ

作品に品格を求め、清新な花鳥画を描き続けた西村昭二郎(1927-99)を筆頭に、筑波大学日本画教授陣には多彩な顔ぶれが集いました。生と死、そして愛をテーマとし、渡辺淳一『失楽園』の挿絵でも知られた村松秀太郎(1935-2018)の作品は、みる者に強烈な印象を与えます。

そして歴代教員の中でも、昭和60年に講師となり、助教授を経て平成29年まで教授を務めた藤田志朗(1951-)と、昭和62年より助手を務め、講師、助教授を経て現在も教授の職にある太田圭(1957-)の2人は、筑波大学の日本画史とともに歩んできた作家といえます。2作家の静謐かつ幻想的な作品は、筑波研究学園都市や筑波大学の空気を映しているのかもしれない。

また程塚敏明准教授(1965-)は、大学生として筑波大学芸術専門学群に学び、同大学院を修了した、生え抜きの純筑波産日本画家です。同じく准教授を務める山本浩之(1970-)と共に、それぞれ所属する創画会、日本美術院で気鋭として注目を集める存在であり、両者の作品からは、先鋭な感性がいっそう強く感じられるのではないのでしょうか。

筑波発の多彩な日本画表現を、際立つ作家の個性と共に、ぜひ会場で味わってください。

[天心記念五浦美術館 首席学芸員 井野功一]



西村昭二郎「風ひかる」1977年
筑波大学アート・コレクション



程塚敏明「Fly Away」2014年
作家蔵



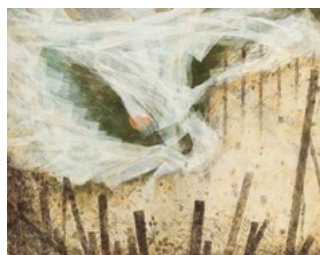
山本浩之「咲う(わらう)」2017年
作家蔵



村松秀太郎「蝦蟇、骸骨、おんな」
1991年 筑波大学アート・コレクション



藤田志朗「夜航海」2006年
作家蔵



太田圭「風の墓標 I」2012年
作家蔵



斎藤博康「緑霧」2020年
作家蔵



平岩洋彦「黄昏碑」1987年
筑波大学アート・コレクション

再開館に向けての取り組み

はじめに

天心記念五浦美術館は、令和2年8月1日より空調設備の工事のため休館しておりましたが、無事工事を終え令和3年4月24日より再開いたしました。その再開記念展として「現代院展のあゆみ 天心記念茨城賞受賞作品を中心に」を開催しておりますが、ここでは展覧会ではなく、広報や普及活動の面から再開館に向けての取り組みをご紹介します。

SNSの開設、新作ミュージアムキャラクター

令和3年2月1日、当館4つめの公式SNSとしてInstagramを開設しました。これにより、細かな文字情報よりも写真やイラストなどの画像を中心とした情報発信ができ、美術館に対しより親しみを感じていただけるのではないかと期待しています。また、Instagramの開設に合わせ、新たなミュージアムキャラクターも増えました。これまでの「天心さん」に加え、大観さん、観山さん、春草さん、武山さんが加わりました。それぞれのイメージカラーは当館で決定しました。いかがでしょうか。今後は彼らも広報・普及活動の面で活躍してくれることでしょう。

そして、広報・普及活動の第一歩として、5人のキャラクターがクリアフォルダーに登場しました。クリアフォルダーには、各キャラクターに関連する図柄を配置したのですが、何を表しているか想像してみてください。このクリアフォルダーは、これから当館で行うワークショップや実技講座等に参加された方に配布していきます。



新たなミュージアムキャラクター



クリアフォルダー

イベント用校服

もう一つ、新たに製作したものがあります。それは東京美術学校の校服です。製作者はなんと当館の職員！



イベント用校服

当館で実際に保管している校服から

型紙を描き起こして試作。襟やベルト、着丈など細部まで調整し、そこから3つのサイズの型紙を作りました。着やすく丈夫で、しかも製作しやすい生地を選ぶのにもかなりの時間を要しました。裏地までしっかりついたこの校服は、親子向けワークショップ「来て・見て・発見！アートツアー for kids」の記念撮影で着ることができます。今後は、より多くのお客様に試着していただける機会をつくっていきたいと考えています。

「アートツアー for kids」もリニューアルしました。これまでは小中学生と当館職員が、一緒に展覧会を鑑賞する活動でしたが、令和3年度からは親子で参加し、展示室だけではなくバックヤードも見ることができるツアーとなります。また、小作品を制作したり、校服を着て記念撮影をしたりと、盛りだくさんの内容となっています。

映像ギャラリーのリニューアル

最後に、コロナ禍に対応するためにリニューアルした映像ギャラリーを紹介します。



これまでは、コンピューターのマウスを使って見たい動画を選択していま

ましたが、指を画面に近づけるだけで動画が再生できます。非接触で操作できることから、感染症予防対策として有効であると同時に、とても使いやすくなっています。ぜひ、お試しください。

休館中でなければ、ここまでの取り組みはできなかったかもしれません。様々な制限がある中でもお客様に美術館を楽しんでいただくため何ができるかを改めて考え、職員で色々アイデアを出し合うことができ、我々にとってよい機会だったと思います。これからも、安心して楽しめる美術館を目指して努力していききたいと思います。

[天心記念五浦美術館 首席学芸主事 横山智絵]

企画展紹介 日本画の150年 明治から現代へ

会 期：令和3年4月17日(土)～6月20日(日)
 ※5月17日(月)に一部展示替え
開館時間：午前9時30分～午後5時(入場は午後4時30分まで)
休 館 日：月曜日
 ※ただしGW中の5月3日(月・祝)は開館、5月6日(木)休館
入 場 料：一般610(490)円／満70歳以上300(240)円／
 高大生370(320)円／小中生240(180)円
 ※()内は20名以上の団体料金
 ※障害者手帳等をご持参の方は無料
 ※土曜日は高校生以下無料
 ※6月5日(土)は満70歳以上の方は入場無料
主 催：茨城県近代美術館
後 援：水戸市／朝日新聞水戸総局／茨城新聞社／NHK水戸放送局／
 産経新聞社水戸支局／東京新聞水戸支局／日本経済新聞社／
 水戸支局／毎日新聞水戸支局／読売新聞水戸支局

予約優先制

入場はオンラインで「日時指定WEB整理券」(無料)を取得された方が優先入場となります

予約は、来館日の1ヶ月前より可能です(各時間帯の定員に達し次第、締め切りとなります)。

「日時指定WEB整理券」の詳細は当館HPをご覧ください。

展覧会の概要

幕末から明治にかけて西洋絵画が本格的に紹介されるようになると、画家たちの中には、伝統的な画材を基盤としながら、あらたな時代にふさわしい日本画の創造を目指す人々が現れました。

明治期には横山大観や菱田春草らが、空気感や内面的な感情をどのように表現するかについて試行錯誤し、芸術の自由が標榜された大正期には、今村紫紅や速水御舟らが独創的な作品を発表しました。古典が見直された昭和前期を経て、戦後、伝統的なものが否定される状況から再出発した画家たちは、それまでの日本画ではあまり扱うことのなかった主題にも取り組み、戦前とは表現を一変させました。その後登場した戦後生

まれの画家たちは、明治以来続いた、西洋絵画を意識しながら日本画を描くことから距離を置き、日本画ならではの特性を生かした制作を行っています。

本展では、受け継がれてきた伝統や技法に基づきながらも、独自の表現を打ち出し、時代を切り開いてきた画家たちの作品を多数展示し、明治から現代に至る日本画150年の流れをたどります。

みどころ

本展では、展示スペースの関係上通常はなかなか実現できない方法で作品を展示したり、今まで紹介する機会の少なかった作品を展示したりしています。

小林巢居人が霞ヶ浦の自然や伝説をもとに描いた「水辺画卷」(額装)は、10面のパネルにより構成されるため、5面ずつを上下二段に吊って展示することが多いのですが、今回は全パネル(約17メートル)を繋ぎ展示しています。その手前には、水が様々に変化しながら地上と地中の動植物を育む様子を表現した巢居人の絵巻「土機光象」を展示しています。この作品は展示替えを行い、前期は地上を描いた上巻を、後期は地中を描いた下巻をご覧ください。

第二次大戦後に、それまでとは様相を一変させた日本画も見どころの一つです。敗戦により、伝統的な文化が批判の対象となるなか、日本画で何を表現すべきか深く問い直す者が現れました。彼らは社会問題を画題として取り上げたり、和紙ではなくキャンバスに描いたり、西洋絵画の画材を岩絵具と併用したり、筆ではなく指で描いたり、それまでの日本画とは異なる試みを行いました。そうした作品も含めた多様な日本画の魅力は是非ご堪能下さい。

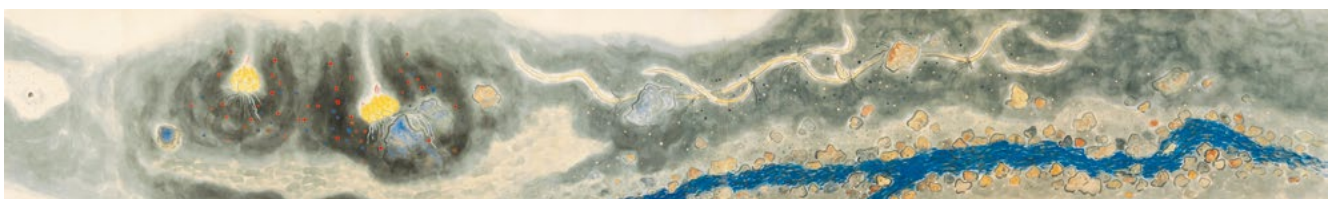
[近代美術館 美術課長 今瀬佐和]



森田曠平「女神春秋 花鎮め」昭和57(1982)年 当館寄託



那波多日功「寂光」平成25(2013)年 当館蔵



小林巢居人「土機光象」(下巻 部分) 昭和18(1943)年 当館蔵 ※5月18日～展示

企画展紹介 いわさきちひろ展

会 期：令和3年7月24日(土)～8月29日(日)
 開館時間：午前9時30分～午後5時(入場は午後4時30分まで)
 休 館 日：毎週月曜日
 ※ただし、8月9日(月・振休)は開館、翌10日(火)休館
 入 場 料：一般1,100(1,000)円/満70歳以上550(500)円/
 高大生870(730)円/小中生490(370)円
 ※()内は20名以上の団体料金
 ※障害者手帳等をご持参の方は入場無料
 ※夏休み期間を除く土曜日は高校生以下入場無料
 主 催：茨城県近代美術館、ちひろ美術館
 後 援：水戸市/朝日新聞水戸総局/茨城新聞社/
 NHK水戸放送局/産経新聞水戸支局/
 東京新聞水戸支局/日本経済新聞水戸支局/
 毎日新聞水戸支局/読売新聞水戸支局

WEB予約をおすすめします

オンラインで「日時指定WEB整理券」(無料)を取得された方が優先入場となります。
 来館日の1カ月前より予約可能です。詳細は当館HPをご覧ください。

展覧会の概要

「世界中のこどもみんなに 平和と しあわせを」と願い、生涯にわたって子どもを描き続けた画家、いわさきちひろ (1918-1974)。美しく清らかな色彩に満ち、巧みな描写力に裏付けられた彼女の作品は、ちひろの没後約半世紀を経た現在でも色あせることはありません。そのやさしさにあふれた作品イメージの一方で、戦争を経験し、戦後の困難な時代に「絵描き」として生きることを選んだ彼女の人生は決して平坦なものではなく、母として、そして絵描きとして、力強く55年の生涯を生き抜きました。

本展では、童画家として世に出たちひろが、次第に絵本作家として才能を開花させ、『あめのひのおるすばん』(いわさきちひろ・文、1968年、至光社)等によって絵本の世界に新境地をもたらすに至る、その生涯と作品を豊富な資料を交えてご紹介します。

ちひろの童画

油彩画



ハマヒルガオと少女
1950年代半ば

雑誌の表紙絵



「あめ」1960年頃

ちひろの生涯と作品

I. ちひろの童画—初期の紙芝居・雑誌・絵雑誌など

いわさきちひろは、大正モダニズムの香り高い、東京・山の手の家庭に育ちました。子どもの頃から絵を描くことが好きで、女学校時代には洋画家の岡田三郎助に弟子入りして油絵を学びます。終戦直後には生活のために新聞記者の職に就きカットや記事を担当、日々スケッチブックを携行して街頭でのスケッチを繰り返したほか、デッサン会に通って修練を重ねました。挿絵などの仕事が多かった中で、1948年、紙芝居『お母さんの話』の依頼を受け、初めて大きなサイズの作品を手がけます。この仕事に手応えを感じたちひろは絵を描くことで身を立てる決意を固め、新聞社を退職しました。そして雑誌や絵雑誌の表紙絵、広告の挿絵など舞い込む仕事を懸命に手がけていく中で次第に頭角を現し、売れっ子「童画家」となりました。

II. ちひろの絵本—新たな世界を開拓

挿絵の仕事により童画家として評判になったちひろのもとへ、初めて絵本一冊まるごと手がける仕事(『ひとりのできるよ』文・小林純一、福音館書店、1957年)が舞い込みます。この仕事が高く評価され、また戦後の児童書出版ブームという時代の趨勢もあり、ちひろのもとには絵本の仕事の依頼が相次ぎました。絵本作家としての評価が高まる中、至光社の編集者・武市八十雄との出会いにより、ちひろは新たな絵本づくりに取り組み、『あめのひのおるすばん』をはじめ絵と文が一体となった創作絵本を世に問い、絵本の可能性を広げました。

ちひろの絵本

一とても素朴なだけけれどたいせつなもの、それが絵本の中にはあるんです。(いわさきちひろ 掲載誌未詳 1972年)



カーテンにかくれる少女 1968年(『あめのひのおるすばん』至光社より)



おさんぼ 1970年(『もしもしおでんわ』童心社より)

Ⅲ. ちひろと戦争—子どもたちに思いを寄せて

ベトナムにおける爆撃や虐殺の様子が日本にも伝えられる中、戦時下の子どもたちに思いを寄せたちひろは編集者の求めもあり、絵本『戦火のなかの子どもたち』（いわさきちひろ・文、1973年、岩崎書店）を手がけます。戦争では罪のない子どもたちが犠牲になることを、戦争を知らない世代に伝えるべく制作に取り組みました。この時すでに癌に冒されていたちひろは、体調を崩し入退院を繰り返しながらも1年以上の歳月をかけて描き上げ、翌1974年、55歳の若さで亡くなりました。

ちひろと戦争——



焰のなかの母と子
1973年
（『戦火のなかの子どもたち』
岩崎書店より）

一戦場にいかなくても戦火のなかで子どもたちがどうしているのか、どうなってしまうのかよくわかるのです。子どもは、そのあどけない瞳やくちびるやその心までが、世界じゅうみんなおなじだからなんです。（いわさきちひろ 1973年）

ちひろの四季——



はなぐるま 1967年



赤い帽子の男子 1971年

ちひろと子ども——



はだかんぼ 1970年（『おふろでちゃぶちゃぶ』童心社より）



どんぐりと男子 1972年



プレゼント 1969年



母の日 1972年

—小さい子どもがきゅっとさわ
るでしょ、あの握力の強さはと
てもうれしいですね。
（『対談 子どもを描きつけて』
『教育評論』日本教職員組合
1972年11月号）

みどころ

ちひろの四季—季節のうつろいと子どもたち

草花を愛し、庭で草いじりを始めると仕事を忘れて熱中してしまったというちひろ。季節のうつりかわりを肌で感じながら、子どもたちの折々の姿を描きました。

ちひろと子ども—赤ちゃんの月齢までも描き分ける

終戦直後に疎開先から単身上京した頃から、ちひろは気づくと子どもの姿を描いていました。1951年に長男・猛が誕生すると、作品に登場する子どもの姿で長男の成長が分かるといわれたほどに、身近なモデルを得て作品は生き生きと動き出しました。モデルがなくても子どもの姿が描けるまでになったちひろは、赤ちゃんの月齢をも描き分けたといわれます。赤ちゃんを「さわって育てた」というちひろの絵には、やわらかな肌の感触、温もり、そして心地よい肉体の重さまでもが表わされているようです。

本展では、作品の他に関連資料として再現したアトリエや遺品などの資料も多数展示し、いわさきちひろの生涯を詳らかにご紹介します。本展をきっかけとして、長く人々に愛されてきたちひろの作品世界に改めて注目していただけたら幸いです。

[近代美術館 首席学芸員 吉田衣里]

*作品は全てちひろ美術館所蔵

昨年度の「withコロナ」を振り返る—「6つの個展 2020」から

昨年開催した企画展「6つの個展 2020」(2020年11月3日～12月20日、以下「6つの個展」)の出品作品の1点、塩谷良太(1978-)による《ひとてま》(fig. 1)は、「握手」という

行為や概念を形にした作品である。握手は友好や信頼、親愛の情を双方向的に伝えるもので、物理的あるいは精神的な「人と人のつながり」の象徴ともいえる。作家が考案したのは、握手をする際に、粘土を互いの親指と人差し指の指間部に挟み、手を握り合っただけで離すとできあがる「握手の痕跡」である(figs. 2-3)。《ひとてま》は、釉薬をかけるなどして焼成した多数の「握手の痕跡」を、円や半円など抽象的な形状に並べたインスタレーション作品である。



fig. 1 塩谷 良太《ひとてま》
「6つの個展 2020」
茨城県近代美術館 会場風景 撮影:大谷一郎



fig. 2 「握手の痕跡」をつくる
塩谷良太「ひとてまワークショップ」より
2020年11月14日、筆者撮影
※手袋・アルコール消毒等感染症対策を行った上で実施

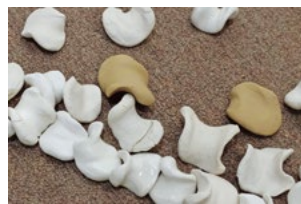


fig. 3 粘土状の「握手の痕跡」(茶色)と、
焼成したもの(白)
2020年11月14日、筆者撮影

「6つの個展」において、《ひとてま》は日本とイタリアの2か所で展開され、両方合わせて一つの作品というコンセプトであった。当館ではこれまでに例を見ない展示形態となったが、イタリアにおける展示については、本展の図録では全く触れられていない。これはご多分に洩れず、2020年以來いまだ終息を見ない新型コロナウイルス感染症ゆえのことで、昨年の夏から秋口にかけて図録を制作している段階では、コロナ禍のイタリアで展示が本当に可能なのか半信半疑の気持ちが拭えなかったからである。紆余曲折の末、最終的には実現に至ったのだが、イタリアに関する部分の記述については図録から綺麗に抜け落ちることになってしまった。本稿ではその反省と記録も兼ねて、コロナ禍における作品展示の一例として紹介したい。

《ひとてま》のそもそもの発端は、2011年、塩谷が東日本大震災後に福島県の柳津温泉街で行ったワークショップである。原発事故により避難を余儀なくされた双葉郡葛尾村の人々が3ヶ月にわたる避難生活を送った温泉街をあとにする際、彼らを受け入れた柳津の人々との握手を形に残す「ひとてまワークショップ」が実施されたのである。その後、塩谷は留学先のイタリアでこのワークショップを発展させて、多数の「握手の痕跡」を造形的に構成するインスタレーション作品《ひとてま》を、様々な場所で展示してきた。

当初、この作品は「6つの個展」に展示される予定ではなかった。しかし、世界的な疫禍のさ中で展覧会の準備を進める過程で、「withコロナ」という極めて特異な状況に 대응するイベントとして、「感染症予防の手袋をして握手をする」というアイデアとともに「ひとてまワークショップ」が組上り上がったのである。そして、ソーシャルディスタンスを金科玉条に、人と人との関係のあり方が劇的に変容していく中で、「握手の痕跡」によって「人と人とのつながり」を体現してきた作品《ひとてま》もこれまでとは異なる受け止められ方をするのではないか——そのような思惑によって、ワークショップの開催と作品の出品が決定した。あわせて、塩谷とイタリアとのつながりもあり、作家サイドで同国における展示の手配や準備が進められることになった。「6つの個展」における《ひとてま》(fig. 1)は大中小の楕円から成り、その一部分が展示室の壁によって断ち切れ、楕円の残り、つまり展示室の壁の「向こう側」にあたる部分はイタリアで展示されて、日本側と合わせて完全な楕円形を形成する——それが作家の青写真であった。なお、このイタリアの展示計画が、コロナ禍における《ひとてま》の「見え方」に、より一層の陰影を与えたのは間違いない。思い出されるのは、2020年3月、イタリアが欧州におけるコロナ禍の最初の激震地となり、北部を中心に文字通りの惨禍を経験した国だということである。加えて、同地では握手をはじめとする身体的な触れ合いが日本よりもずっと身近であることも、それらが絶たれた後にこの作品が帯びる意味を考える上で、重要な視点となった。

秋以降、イタリアでは新型コロナウイルスが再度流行拡大の兆しを見せ、ローマの美術学校で展開する予定だった《ひとてま》の展示は中止せざるを得なくなった。幸い、「6つの個展」開幕直前の10月末になって、トスカナ地方のセミフォンテに建つサン・ミケーレ礼拝堂(fig. 4)を展示会場とすることが決まったが、イタリア側の尽力によって作品の設営が完了したのは11月下旬のことであった(figs. 5-6)。なお、イタリアでは11月中旬に流行第二波のピークを迎えており、この頃には各地がロックダウンに入っていたため、会場の様子は写真や動画によってオンラインで公開された。



fig. 4 サン・ミケーレ礼拝堂、セミフォンテ
Photo by Francesco Sammiceli

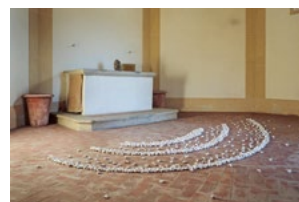


fig. 5 《ひとてま》会場風景 サン・ミケーレ礼拝堂
2020年11月30日撮影
Photo by Francesco Sammiceli



fig. 6 《ひとてま》会場風景 サン・ミケーレ礼拝堂
2020年11月30日撮影
Photo by Francesco Sammiceli

先に述べた通り、《ひとてま》は未曾有の災禍によって住み慣れた土地から引き離された人々が避難先で経験した出会いと別れを通して生まれた作品である。そして、当館で展示されたインスタレーションは、福島をはじめ各地で交わされた「握手の痕跡」約3,000個によって構成され、会期中に当館で開催されたワークショップで交わされたビニール手袋ごしの「握手の痕跡」もそこに加わった (figs. 2-3)。それらのピースは、一つ一つが折々の出会いや別れ、触れ合いの記憶をその身にまとい、歴史的なパンデミックのただ中で、イタリア・トスカナ地方の小さな礼拝堂と新たにつながったのである。《ひとてま》が展示されたサン・ミケーレ礼拝堂が建つセミフォンテはフィレンツェから車で30～40分のところに位置し、中世の城塞都市があった地である。1202年、セミフォンテはフィレンツェ軍の侵攻により、籠城戦の末に完膚なきまでに破壊され、街を追われた住民は各地に散っていった。日本とイタリアとで3つの楕円を描いた「握手の痕跡」は、時空を超えて、福島あるいはセミフォンテの人々の邂逅や別離、離散、土地との別れ、故郷喪失といった記憶に私たちを誘うことにもなったのである。

《ひとてま》の個々のピースは「かつて誰かと誰かが手を介してつながった」という事実の記録であり、過ぎ去った一瞬の痕跡でもある。そしてその上には、握手が交わされた、あるいは「握手の痕跡」が並べられた状況にまつわる、人や場所の記憶も様々に降り積もっていく。しかし、作品の時間軸は過去にばかり向いているわけではない。今年に入って、美術館の近隣、水戸市内の中学校に設置されたギャラリーに《ひとてま》が展示される機会があった (fig. 7、「塩谷良太つながる「ひとてま」プロジェクト～目の前のあなたと、ここではないどこかへ、今ではないいつかに～」2021年2月22日～3月24日)。会期中に3月11日を迎えたこともあり、まず想起されたのは震災以降にこの作品が引き受けてきた10年という時間である。その一方で、外側の楕円が軌道のようなつらなりを崩しながらばらけていく様は、未知の「ここではないどこか」に向かう広がりや想像させ、「今ではないいつか」へ、コロナ禍で様々な制約下にある現在からの解放も思わせた。躊躇することなく握手を交わすことが再び可能となる未来と、withコロナの記憶を内に含むこの作品がまた別の「見え方」を獲得するであろうafterコロナの世界を、今はただ待ちたいと思う。

[近代美術館 首席学芸員 澤渡麻里]



fig. 7 《ひとてま》会場風景
ギャラリーひのたて (水戸市立第一中学校内)
2021年3月12日、筆者撮影

昨年12月5日、『『傑作』の眩惑』という演題で、筑波大学芸術系准教授、寺門臨太郎氏をお迎えして美術講演会を開催しました。

この講演会は、レンブラントの《夜警》やフェルメールの《青いターバンの少女》といった「傑作」と呼ばれる17世紀のオランダ絵画を取り上げ、時代背景や社会制度等を視野に入れながら、誰が「傑作」と呼ぶものを作りあげ、わたしたちは「傑作」と呼ばれるものに何を見ているのかを考えるものでした。

当日は、「傑作」というイメージを作りあげた、同時代及び後世の人々の証言をもとに、その過程について具体的にお話いただきました。また、17世紀のオランダ絵画が生まれた社会あるいは時代背景について、当時の地図や美術作品のスライドを使って、丁寧に説明いただきました。

この講演会には、81名の参加者があり、皆さん熱心に耳を傾けていました。参加者からは、「美術作品に対してビジネスとして扱っているところが現代と同じに感じられ、大変面白かった」「この時代の絵画制作は大量生産システムが台頭し、分業化や大規模化が進んでいたことに驚いた」「名作や傑作などといわれ、俗世間から超越した存在として語られる作品には、商品として扱われていたという現実的な側面もあることを再認識した」といった声や、「講演でのお話は答えを提示するのではなく、考え方の道筋を示していただいたため、自分で考えることができ面白かった」「これから絵画を見るとき楽しみが増しました」「他の人に話したくなるネタがたくさんありました」などの感想もあり、大変好評のうちに終了しました。

今回の講演により、少しでも多くの参加者が、オランダ絵画、さらには西洋美術史等への興味関心を高めるきっかけになっていただけたならば幸いです。



令和2年度新収蔵作品と新型コロナウイルス

当館は、令和2年度、日本画7点、版画21点、彫刻4点の計32点の作品を収蔵しました。これらのうち、小林恒岳、村松秀太郎(以上日本画)、土谷武(彫刻)の作品は、作者のご遺族から、倉島重友(日本画)の作品は作者ご本人から、また版画作品は、長年にわたり当館へ版画を寄贈してくださっている県内在住のコレクター、照沼毅陽氏から、それぞれ寄贈していただいたものです。あらためて、心より感謝申し上げます。

これら32点は、実は本来、令和元年度の収集候補作品でした。元年度末、コロナ禍のため予定していた審査委員会が開催できず、元年度中に収集しなければならない事情があった1点のみ、委員各氏に書面による諮問を行って収集した経緯については、本誌No.116

(2020年5月15日発行)で述べたとおりです。令和2年度に入り、なるべく早い時期での委員会開催を視野に入れつつコロナの状況を鑑み、結局、8月7日に審査委員会を開催し、元年度から持ち越された32点を、無事、収蔵することが出来ました。

一方、令和2年度末も、コロナ禍のため委員会を開催できず、本来なら令和2年度の収集候補作品について、ふたたび年度を持ち越すかたちになってしまいました。委員会の性質上、委員各氏には作品を実見の上、判断していただかなければならないため、リモートでの会議は難しく、令和元年度・2年度と、コロナに翻弄された作品収集活動となりました。

[近代美術館 企画課長 山口和子]



小林 恒岳 (1932-2017)
「秋・黎明の月」1989年
各 縦163.5×横224cm

作者は長年、茨城県石岡市高浜の霞ヶ浦湖畔に住み、水辺の自然をモチーフとして描いてきたが、1988年、同市内の吾国山(わがくにさん)中腹(旧八郷町)へ転居。以後は山々が連なる雄大な風景や、そこに生きる動植物等にまで対象を広げていった。ここでは、遠く筑波山を望む山里に、画面左方より朝日が差し込む一瞬、刻々と変化していく情景が描かれている。



倉島 重友 (1944-)
「紹興雨余」1993年
縦170×横215cm

日本美術院同人として活躍中の作者は、身近な人物や自然、また取材旅行で訪れたインドや中国などの風景とそこに暮らす人々に目を向けた作品で知られている。作者が初めて中国を旅したのは1982年。その後訪れる度に発展していく都会に対し、以前と変わらぬ姿をとどめる紹興の風景に郷愁を覚えた作者の思いが、ここに表されている。



土谷 武 (1926-2004)
「蝶 III-a」1994年
高35×幅47×奥行40cm

作者は日本の抽象彫刻を代表する作家のひとり。主に鉄という固い素材を用いながら、独自の造形感覚に基づき、しなやかに生命感溢れる作品を創出した。この作品は薄い鋼板を蝶の羽に見立てて構成したもの。接地面の小ささは軽快な印象を生み、その形状は、周囲へとエネルギーを放出するようなイメージを醸し出している。



谷 善徳 (1968-)
「鴻雁北(こうがんきたす)」2018年
縦219×横174cm

再興第103回院展で第24回天心記念茨城賞を受賞した作品。茨城県へ寄贈後、県から当館へ管理換された。「鴻雁北」は七十二候のひとつで、日本で冬を過ごした渡鳥が北へ帰る頃を意味し、4月10日～14日頃に相当する。この作品では、山形県の蔵王から昇る朝日のもと、雁の群れがシルエットで描かれている。まだ雪解け水の残る田が、陽光に照らし出されてきらめく様も美しい。

茨城県近代美術館企業パートナーシップ事業

支援パートナー様とともに創りあげる芸術文化振興の新しいシステム

これは、従来からの賛助会や友の会制度とは異なり、企業や団体等の皆様と当美術館がパートナーシップを結び、本県の文化芸術の振興と一緒に取り組んでいこうという、新しいシステムです。

支援パートナー様からのご支援は、展覧会の開催をはじめ調査研究、教育普及活動のほか、広報活動や館の運営事業などに活用させていただいております。

一方で、美術館が支援パートナー様に提供する特典については、昨年度はコロナ禍ということもあって、計画どおりの展開が図れなかったことは悔やまれるところです。

このような状況ではありましたが、支援パートナーの皆様には引き続き今年度も契約を継続していただきました。そして新たに、プラチナパートナーに株式会社アダストリア様をお迎えし、近代美術館友の会様にはゴールドパートナーになっていただくなど、さらに充実した支援体制となりました。

◇3つのパートナープラン◇

プラチナパートナー：300万円

ゴールドパートナー：100万円

シルバーパートナー：50万円

このシステムでは、ご支援いただく金額に応じて様々な特典を提供させていただきます。
詳しくは、当館ホームページでご確認ください。

◇令和3年度の主な事業◇

〈展覧会への支援〉

令和3年度に開催される企画展のうち、次の2企画展を支援します。

- ・「いわさきちひろ展」(令和3年7月24日～8月29日)
- ・「ランス美術館コレクション 風景画のはじまり コロアから印象派へ」(令和4年2月9日～3月27日)



いわさきちひろ
「おさんぽ」1970年
〔もしもしおでんわ〕童心社より
ちひろ美術館蔵



クロード・モネ
「ベリールの岩礁」1886年
ランス美術館蔵
©MBA Reims 2019/
Photo: C. Devleeschauwer

〈教育普及アートバス事業〉

学校の教育活動として、近代美術館の展覧会鑑賞をはじめ、ハロー！ミュージアムやアートツアー、ワークショップ等を目的に来館した学校に、当該事業を実施するために必要なバス借上げ料を助成します。本年度は、県内20市町村の小学校25校で実施します。



〔昨年度の様子〕

①ハロー！ミュージアム



美術館の講堂にある大きなスクリーンに映し出される、楽しい映像と音楽、美術館職員のトークで作品の見方や楽しみ方について学ぶ。

②アートツアー



ART鑑賞トランク（鑑賞補助教材）を使い、美術館職員との対話を通して作品を鑑賞することで、作品の見方を広げ、鑑賞を楽しむ対話型アートツアー。

③ワークショップ



「オリジナル缶バッジ」など展覧会の内容に合わせた楽しいものづくりを体験。

④展覧会鑑賞〔6つの個展2020〕



ハロー！ミュージアムやアートツアーで学んだことを生かして、展覧会を鑑賞（須藤玲子「扇の舞」を見ることもたち）。

〈新型コロナウイルス感染症対策〉

このコロナ禍にあっても充実した企業パートナーシップ事業を展開していくため、感染症対策に必要な機材等を整備し、安全安心の確保に努めます。

◇企業パートナーの皆様◇

〈プラチナパートナー〉



〈ゴールドパートナー〉



〈シルバーパートナー〉



茨城県近代美術館

〈企画展・関連イベント〉
〈日本画の150年 明治から現代へ〉
4月17日[土]～6月20日[日]

〈いわさきちひろ展〉
7月24日[土]～8月29日[日]

・講演会「いわさきちひろの絵と人生—画家として、妻として、母として」
[講師] 竹迫祐子(公財)いわさきちひろ記念事業理事 ちひろ美術館学芸員
期日: 8月9日[月・振]
時間: 午後2時～午後3時30分
定員: 80名※要申込

・ちひろの水彩技法体験ワークショップ
「オーナメントをつくろう!」
[講師] 原島恵(ちひろ美術館学芸員)
期日: 7月25日[日]
時間: 午前10時30分～午前11時30分
午後1時30分～午後2時30分
定員: 15名程度※要申込

・子ども向けワークショップ「にじみで缶バッジづくり」
期日: 8月7日[土]・8日[日]
時間: 各日午前10時～午前11時30分
午前11時～午前11時30分
定員: 各回10組程度(高校生以下)※要申込

・育児講座「親子で楽しむ絵本時間」
[講師] 熊倉裕子・野口美弥子(水戸市立図書館育児コンシェルジュ)
期日: 7月31日[土]
時間: 午前10時30分～午前11時30分
午後1時30分～午後2時30分
定員: 各回10組程度※要申込

・おはなし会「いわさきちひろの絵本の世界」
[講師] 四つばの会(水戸市立東部図書館ボランティア)
期日: 7月24日[土]・28日[水]・
8月4日[水]・15日[日]・18日[水]・29日[日]
時間: 各日午前10時30分～/会場: 1階アートフォーラム
定員: 各日先着15名程度(申込不要)/参加費: 無料

〈所蔵作品展 第1展示室〉
〈日本の近代美術と茨城の作家たち 夏〉
6月22日[火]～9月12日[日]
※8月2日[月]に一部展示替え

〈所蔵作品展 第2展示室〉
〈武井武雄 刊本作品の世界〉
6月22日[火]～9月12日[日]

・令和3年度第1回美術館アカデミー
「ミクロの眼で見る武井武雄の刊本」
[講師] 島田裕之(茨城大学教育学部教授)
期日: 7月10日[土]
時間: 午後2時～3時30分
定員: 80名※要申込/参加費: 無料

〈アートフォーラム展示〉
〈茨城と日本画—中世から近代まで—〉
4月27日[火]～7月18日[日]

〈夏休み子ども展示 [仮]〉
7月20日[火]～9月12日[日]

〈その他のイベント〉
・子どものためのワークショップ
期日: 8月21日[土]・8月22日[日]
会場: 地階講座室
協力: 茨城大学教育学部

・美術館セミナー
[講師] 末永幸歩(「13歳からのアート思考」(ダイヤモンド社)著者)
期日: 8月6日[金]
時間: 午後1時30分～4時
会場: 地階講座室
定員: 県内の教員80名※要申込

※各イベントの詳細や申込方法は当館ホームページをご覧ください。

茨城県つくば美術館

〈土曜講座〉
時間: 各日午後1時30分～/会場: 2階アールスホール
料金: 無料

6月19日[土]
・第3回「筑波大学 日本画コース 40年を振り返る」
[講師] 井野功一(天心記念五浦美術館首席学芸員)

7月31日[土]
・第4回「夏企画テーマ「土イジリ」」
[講師] 岩井基生(茨城県陶芸美術館主任学芸員)

8月14日[土]
・第5回「いわさきちひろの作品と生涯」
[講師] 吉田衣里(茨城県近代美術館首席学芸員)

9月11日[土]
・第6回「ひろがる墨—五彩に出会う」
[講師] 堀田和雄(天心記念五浦美術館学芸員)

〈貸ギャラリー展〉
6月1日[火]～6月6日[日]
・アトリエ・ハートタイム展2021[絵画]

6月8日[火]～6月13日[日]
・第31回茨城自然写真の会展覧会[写真]

6月15日[火]～6月20日[日]
・松山敦子・キルトスタジオA-two
「第20回パッチワークキルト展」[パッチワークキルト]

6月22日[火]～6月27日[日]
・アートウェーブつくば第26回展[総合]

6月29日[火]～7月4日[日]
・武蔵野美術大学校友会第18回茨城支部展[総合]

7月6日[火]～7月18日[日]
・令和3年度茨城県移動展覧会「茨城の美術セレクション」[総合]

7月20日[火]～7月25日[日]
・モモイナフラワーと仲間たち[工芸]

7月30日[金]～8月9日[月・振]
・つくばメディアアートフェスティバル[映像]

8月11日[水]～8月15日[日]
・女流画家協会 つくば展[絵画・版画]

8月24日[火]～8月29日[日]
・夏休みアート・デイキャンプ展[絵画]

9月7日[火]～9月12日[日]
・第25回七彩会[絵画]

9月14日[火]～9月26日[日]
・つくばアートサイクルプロジェクト アントロポセン—
分岐点を越えた景色[現代アート]

9月28日[火]～10月3日[日]
・全日本写真連盟第26回常総支部写真展[写真]

茨城県天心記念五浦美術館

〈企画展・関連イベント〉
〈筑波大学 日本画40年の軌跡〉
6月12日[土]～7月18日[日]

・担当学芸員による作品解説
期日: 6月26日[土]
時間: 午後1時30分～(約30分)
会場: 講座室/定員: 30名(参加無料) 要事前申込(抽選制)

〈ひろがる墨—五彩に出会う〉
7月28日[水]～9月26日[日]

・担当学芸員による作品解説
期日: 9月5日[日]・9月18日[土]
時間: 午後1時30分～(30分程度)
会場: 講座室/定員: 54名(参加無料)

・リモートワークショップ「墨 de 和傘」作品展示
期日: 7月28日[水]～9月26日[日]/会場: 未定

〈その他イベント〉

・来て見て発見! アートツアー for kids
期日: 8月7日[土]
時間: 午前の部10時～12時、午後の部1時30分～3時30分
定員: 小中学生と保護者5組 要事前申込(抽選制)

・茨城県警察音楽隊ふれあいコンサート
出演: 茨城県警察音楽隊/北茨城市立関本中学校吹奏楽部
期日: 8月21日[土]/時間: 未定
会場: エントランスロビー(予定)

〈映画会〉

会場: 講座室/定員: 54名[要事前申込、先着順]/無料
時間: 各日午前10時30分～
・6月8日[日]「加奈子のこと」33分
・7月4日[日]「IMC」17分
「心象世界への彷徨 日本画家 藤田志朗の世界」15分★
「どこでもない場所 日本画家 程稼敏明」28分★
★は展覧会関連作品

※新型コロナウイルス感染症の影響により、イベントが中止または延期となる場合がございます。最新の情報を各館ホームページ等でご確認ください。



茨城県近代美術館

〒310-0851
水戸市千波町東久保666-1
TEL 029-243-5111
FAX 029-243-9992

HP <http://www.modernart.museum.ibk.ed.jp/>



茨城県つくば美術館

〒305-0031
つくば市吾妻2-8
TEL 029-856-3711
FAX 029-856-3358

HP <http://www.tsukuba.museum.ibk.ed.jp/>



茨城県天心記念五浦美術館

〒319-1703
北茨城市大津町椿2083
TEL 0293-46-5311
FAX 0293-46-5711

HP <http://www.tenshin.museum.ibk.ed.jp/>

県立美術館3館(近代美術館・天心記念五浦美術館・陶芸美術館)共通の年間パスポートを発売中! 詳しくはお問い合わせください。

美術館では以下の方は無料で展覧会をご覧いただけます。

○土曜日美術館の高校生以下の方(ただし、土曜日が夏季、冬季及び学年末・学年始における学校の休業日に当たるときは除きます) ○教育活動としての茨城県内の小・中・高義務中等教育 特別支援学校(県外含む)の児童生徒及び引率者並びに教育活動としての茨城県内の幼稚園の幼児の引率者 ○国際交流事業として国外から本県に留学している方 ○児童福祉施設、身体障害者更生支援施設、知的障害者支援施設、老人福祉施設に入所している方及び付き添いの方(1人につき付き添い1人まで) ○身体障害者手帳、療育手帳の交付を受けている方及び精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方並びに付き添いの方(1人につき付き添い1人まで) ○指定難病特定医療費受給者証の交付を受けている方並びに付き添いの方(1人につき付き添い1人まで) ○生活保護法により扶助を受けている方

友の会ニュース 友の会では皆様のご入会をお待ちしております。

〈お知らせ〉

新型コロナウイルスの感染状況を踏まえ、会員の安心安全を最優先に当面活動を、自粛しております。状況が安定して参りましたら再開いたしますので、友の会活動へのご参加をお待ちしています。

〈あなたも友の会会員になりませんか〉

茨城県近代美術館友の会は、美術を愛好する人たちが集い、美術館の活動を支援しながら、会員相互の教養を高め、親睦を図ることを目的として、幅広い活動をしています。茨城県天心記念五浦美術館と共通の友の会です。



近代美術館と天心記念五浦美術館のすべての展覧会が無料!! 海外美術鑑賞旅行や国内美術鑑賞旅行に参加できます。美術講座・学芸員によるギャラリートークに参加できます。会報誌「游美」3回/年、友の会行事案内・美術館資料が郵送されます。図録購入、レストランでの食事に割引があります。

会員の特典

初年度会費及び年会費

会員の種類	入会時期(月)と入会金(円)			次年度からの年会費(円)
	4～7月	8～11月	12～3月	
学 生	2,000円	1,500円	500円	2,000円
一 般	3,000円	2,000円	1,000円	3,000円
ファミリー	5,000円	3,000円	2,000円	5,000円
特別・法人	20,000円			20,000円

入会の申し込み

友の会事務局(☎029-243-5111)または、県近代美術館/県天心記念五浦美術館受付にお申し込みください。
友の会ホームページからも入会できます。
アドレスは…<https://www.fmoma.com>

